

# Y Yokohama Art Site

Yokohama Art Site

特集

農からはじまる



vol.

036

2023

虹色畑クラブでの農作業の様子



特集

# 農からはじまる



a.



b.

レポート1

## 虹色畑クラブ

農作業を通してその人自身を取り戻す場所

### 自身の経験から辿り着いた場所

日吉から車で数分、住宅街を抜けると突然、広大な畑の風景が広がる。こんな場所に畑があったなんてと驚く人も多いだろう。その農園の一角で、生きづらさを抱える人が畑作業を通して元気を取り戻す場所、虹色畑クラブが開かれている。「何よりも私自身が楽しく生きる力を得られたと思います」。そう語る代表の原田朋子さんは、畑作業を始めると瞳が輝きだす。青く実ったオクラをもいで、「新鮮な野菜って味がぜんぜん違うでしょ」とにっこり微笑んだ。以前、原田さんは企業に就職していたが、休職を経て退職。その後、うつ病で通院し、やがて発達障害の傾向があることが分かった。障害について学ぶなかで出会っ

た「成人発達障害と歩む会『シャイニング』」にて、当事者や家族、支援者との対話を通して、自分の好きなこと、嫌なことが整理された。その時に原田さんのなかで、小さな頃に祖母の家で親しんでいた農作業の記憶が蘇った。それから畑との関わりを開始、やがて家の近くにあった藤田農園で援農を始めることになった。2016年から「虹色畑クラブ」の活動を開始し、生きづらさを抱える人とともに農園の手伝いをしている。

### 太陽と土の香りに元気をもらう

虹色畑クラブでは発達障害や引きこもり、ニート、精神障害の当事者やその家族、支援者が参加する。当事者の会では自分のことを話す機会が多いが、そのことに疲れてしまう時もある。しかし農作業では自分自身のことを話さずに、ただ一緒に作業することができる。また関わり方も自由で、ただ畑で横になっているだけの人もいう。その中で少しずつ気力と体力を取り戻していった人も

農業や自然とのつながりの中で人が集まり、  
小さな文化を育む活動を行うみなさんにお話をお伺いしました。

レポート1 虹色畑クラブ「農作業を通してその人自身を取り戻す場所」

レポート2 よこはま里山研究所(NORA)「里山とかかわる暮らしを」

レポート3 チャコ村「みんなで作るみんなの居場所」



c.



d.

- a. 虹色畑の採れたてのオクラをかじる
- b. 虹色畑クラブ代表の原田朋子さん
- c. 虹色畑の様子
- d. ふだんの活動の様子

多い。現在スタッフとして虹色畑クラブを支えるスタッフの中には、8年間引きこもっていたという人もいる。原田さんは「ここに来ればやることがあり、自分の仕事の成果が野菜の成長としてすぐに現れてくるんですね。そんな小さな成功体験の積み重ねが生きづらさを和らげてくれているのかもしれない。何より太陽と土の香りに癒やされますね」と語る。

効率ではなく、その人自身が輝くために

虹色畑クラブは今年度からヨコハマアートサイトに参加し、アートを取り入れた活動を開始している。そのきっかけになったのは昨年度までヨコハマアートサイトに参加していた「居場所『カドベヤで過ごす火曜日』実行委員会」(以下、カドベヤ)の横山千晶さんとの出会いだ。カドベヤは寿町の近くで毎週火曜日の夜にアートワークショップと食事会を行っている団体だ。原田さんは、みんなで時間をともにし、参加者自身の魅力が表現

されるカドベヤのアートのあり方に共感。横山さんも虹色畑クラブの活動にカドベヤと通じるものを感じ、畑に足繁く通うように。意気投合した両者は、今年9月に共同で「NPO 法人タネとスプーン」を設立した。「虹色畑クラブは効率的な生産のためではなく、その人自身が輝ける場所をつくるものです。その目的にはアートがとてもマッチしているとカドベヤを通して気づきました。どのような生きづらさを抱えているかではなく、何が好きな人かという見え方が生まれてくることを期待しています」。今後は畑でのイベントや農産物を活用した作品づくりなどの展開を予定している。

虹色畑クラブ

神奈川県横浜市港北区高田町 横浜 藤田農園

WEB: <https://ameblo.jp/niji-iro-hatakeclub/>

SNS: <https://twitter.com/nijirohatake>

<https://m.facebook.com/nijirohatake/>



## よこはま里山研究所(NORA)

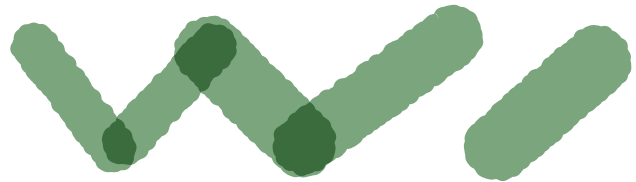
里山とかかわる暮らしを

### 里山から学ぶ

横浜に多く残る「里山」では、かつて人々が山や畑などと共に生きてきた。しかし、近年では生活と自然が分断され、山が荒れてしまうことも少なくない。「よこはま里山研究所(NORA)」（以下NORA）は里山の必要性を訴え、人の暮らしと里山を結びなおす活動を2000年の設立から続けている。理事の三好豊さんは「里山ではさまざまな生物がともに生きて一つの自然を作り上げてきました。多様性がうたわれる時代にある今こそ、私たちは里山に学ぶべきだと考えています」と語る。NORAでは農作業や森の保全活動から、味噌づくりや梅仕事、木工や竹細工など、さまざまな切り口で里山と関われる事業を展開。自分に合った関わり方で、自然との共存を考えることができる。

### 小さな文化を守る

南区の蒔田にNORAの事務所兼フリースペース「はまどま」がある。ここでは料理教室や食事会、映画上映やコンサートなどのイベントを行ってきた。はまどまコーディネーターの松原優佳さんは「食のイベントでは食材がどのように育てられてきたか等、背景を知ってもらうことを大事にしています。過程を知ることは、食と自然の関わりを実感することにつながります。たとえばキッチンで豆苗を育てるだけでも、その味わいは変わってくるのではないのでしょうか」。NORAでは今年、子どもと里山の出会いを描いた絵本「でんえんとし さとやまっ子」と子どもたちから募集した絵と言葉の「NORAのよこはま里山カルタ」を制作した。絵本では里山とかかわる豊かさが伝わり、カルタでは子どもたちの感性に触れられる。「里山に遊びにきた子どもたちはいきいきとします。土や草木にふれること、人が集まって体験を共有する時間はかけがえのないもの



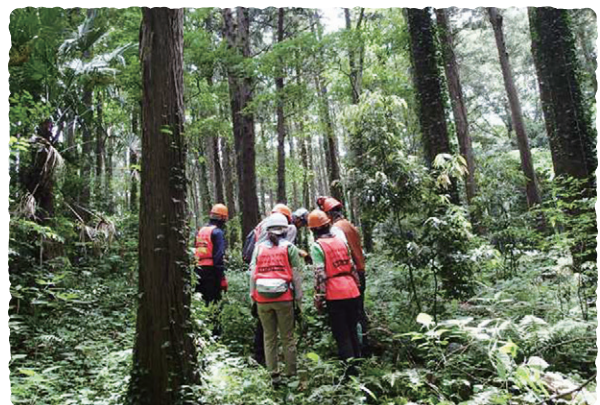
です。自然とともに、そんな小さな文化を守っていくことが大切だと思います」。里山を守ることは横浜の文化を守ることに繋がっている。



a.



b.



c.

a. 右から、三好豊さん、松原優佳さん。「はまどま」にて取材の様子

b. 「でんえんとし さとやまっ子」、「NORAのよこはま里山カルタ」、横浜産の木の器

c. 「NORAの山仕事」の様子

特定非営利活動法人よこはま里山研究所(NORA)

神奈川県横浜市南区宿町2丁目-40 大和ビル119

TEL: 045-722-9674

FAX: 045-722-9675

WEB: Web:<https://nora-yokohama.org/>

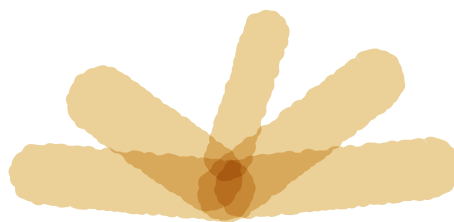
SNS: <https://twitter.com/norayokohama>

<https://www.facebook.com/npo.nora>

[https://www.instagram.com/nora\\_yokohama/](https://www.instagram.com/nora_yokohama/)

## チャコ村

みんなでつくるみんなの居場所



## 祖母の思いを引き継ぐ畑と小屋

都筑区にあるチャコ村は小屋と畑と小さな広場からなるスペース。「みんなのためのみんなの居場所」として畑で農作業をしたり、小屋でお茶を飲んだり、子どもから大人まで地域の人が集まれる場所だ。畑にはゴーヤやナス、綿や藍などがその葉を揺らしていた。「ここは祖母の小屋だったんです」。代表の菊島景子さんは祖母・小泉ヒサさんが農作業の傍ら、この小屋でお茶を飲み、通りがかる人を招いて話しているのを幼いときから見ていた。しかしヒサさんが高齢になり小屋は閉鎖。その頃、次女の不登校に悩んでいた菊島さんは学校以外に子どもの居場所があればと考えていた。そこで思いついたのが小屋の復活だった。いとこの小室さんと協力してこの場所をオープンし、ヒサさんの愛称から「チャコ村」と名付けた。「畑作業も居場所づくりも初めてだったので、行き当たりばったりでしたが近隣の人たちが支えてくれました」。ヒサさんはその2ヶ月後に亡くなったが、楽しい思い出が詰まった写真が小屋に飾られていた。

## 子どもたちのアイデアを活かして

チャコ村にはロコミで子どもたちが集まり、やがて中学校との連携でチャコ村に行くことが学校の出席として認められるようになった。「学校に行っている子も行っていない子も含めて子ども同士で悩みを聞き合っています。大人はそれを傍で聞いているような距離感です」。チャコ村は昨年から「ロジウラート」(ヨコハマアートサイト2023 参加事業)という都筑民家園を舞台に都筑区の多様なアートが集合するイベントに参加。畑で作った

綿から糸をつくるワークショップを展開している。ROJIURARt 代表の柏崎久恵さんは「この場所の良さが少しでも都筑区に広がればと参加してもらいました。菊島さんのみんなを静かに見守る感じが心地いいんですね」と語る。菊島さんは「子どもたちから農作物を活かしたアイデアが飛び出したり、ワークショップでお客さんと触れ合うことで自信をつけた子がいたり活動に広がりがありました」と語る。畑と小屋を通して地域の居場所になったチャコ村。そこにアートの視点が入ることで新たな可能性が見えはじめています。



a.



b.

a. 畑で育てた藍染の衣類をまとう2人(左から菊島景子さん、柏崎久恵さん)。この畑で採れた野菜を子どもたちが料理しふるまっているうちに、自然に子ども食堂のような活動に発展している。

b. 綿から手作業で紡ぐ糸は太くなったり、細くなったり。作者の個性がにじみ出る。

チャコ村  
横浜市都筑区東山田町1681  
TEL: 090-2446-4089  
MAIL: chako8160@gmail.com  
SNS: <https://www.instagram.com/chakomura/>

自然に触れる喜び以外にも、日常的な居場所や、ふだんは結びつきのない人との出会いが得られる農にまつわる体験。今回取材した方々は、活動のなかで予測通りにいかないことに振り回されながらも、知恵を絞りながら、みんなで時間をともにすることに価値を見出していた。これは文化による地域へのアプローチにも通じる。農が文化とかかわることで生産性とは別の新たな可能性が開けると感じた。



## ヨコハマアートサイト2023プロジェクト進行中

「横浜市地域文化サポート事業・ヨコハマアートサイト」は、地域課題の解決にアプローチするため、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける活動や、横浜の個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。2023年7月1日～2024年1月31日にかけて、横浜の各地域でアートイベントが行われます。今年度の活動に、ぜひご注目ください。

今年度のヨコハマアートサイトは応募件数が101件で、例年の1.5倍程度の大幅増となりました。その中から32件の事業の参加が決定しました。横浜のまちの魅力を再発見する事業では、子どもたちが中心となって新しいまちを創造する「NPO法人ミニシティ・プラス」、横浜野毛のジャズ喫茶の歴史を辿り、これからの大衆文化を考える「一般社団法人 ジャズ喫茶ちぐさ・吉田衛記念館」、過去の青葉区美しが丘の写真から住民のまちの記憶を引き出す「どこコレ？ in たまプラーザ運営事務局」などの団体が事業を展開します。

また、旭区の障害福祉施設が連携し、舞台芸術や美術作品の発表や製品販売をするフェスティバル「あっぱれフェスタ実行委員会」、視覚障害児によるインビジュアルアートを展開する「ひよこの会」、発達障害児の家庭の居場所を指し、拠点でアートプロジェクトを展開する「Studio oowa 実行委員会」などが、障害のある人を含む参加者が言語ではないツールで自己表現をする事業を行います。昔ながらの手作業とアートをかけあわせ、共同体の可能性を探る事業は、福祉施設や地域で機織りのワークショップと展示を行う「オリオリオルオル」、生きづらさを抱えた人が畑作業やアートを通して自己表現する場を開く「虹色畑クラブ」などの団体が開催します。

文化でまちに多様なつながりを生むのは、若葉町のまちで地域住民が主体となった事業を展開する「ほる実行委員会」、在日外国人を含む地域住民が芸術にアクセスしやすい環境をめざし、パフォーミングスやワークショップを実施する「Murasaki Penguin」、本棚を通したゆるやかなつながりをまちに生み出す「Little Free Library はちのじぶんこ」などです。







左：アートフェスタ 2023 チラシ、ガス灯と記念碑 中：馬車道まつりの様子（馬車道写真コンクール第23回出展作品 撮影：穴生博昭） 右：馬車道まつりの様子（同コンクール第29回出展作品 撮影：今玉利修司）

## 歴史と文化のプロムナードとその遺産

～街と人に支えられ、街とともに時を刻む～

寄稿：田中 啓介

横浜市市民文化会館 関内ホール 副館長兼事業部長の田中啓介さんが  
横浜の馬車道通りの文化イベントについて語っていただきました。

関内ホールは、文明開化の歴史と文化のプロムナード「馬車道商店街」の中にあり、かつてこの場所には「横浜宝塚劇場」がありました。商店街の一員でもある関内ホールの文化振興は、「馬車道商店街」とその歴史的な遺産なくしては成り立ちません。

関内ホールの前には、「日本で最初のガス灯」記念碑とともに、当時のものを復元したガス灯が立っています。また、施設の内外に多くの貴重な美術品があります。長崎の平和像の作者・北村西望の「平和の女神」や横浜を代表する画家・國領経郎や宮本昌雄の絵画などがさり気なく展示されています。

街を挙げての文化的なイベントは、5月3日の「ザよこはまパレード」、5月9日の「あいくすりーむ発祥記念」、5月末の「ハマフェス」、7月の「関内まつり」と枚挙に暇がありません。その中で最大のアートイベントが、10月31日から11月3日の4日間行われる「馬車道まつり」と同時開催の「アートフェスタ」です。馬車道通り全体で行われる「馬車道まつり」には露店やマルシェが軒を連ね、日本の在来馬とのふれあいコーナーや撮影スポット、開港当時の洋装の人々が街を歩き、通りを本物の馬車や人力車が走ります。

「アートフェスタ」は、ガス事業発祥の地として10月31日の「ガスライトフェスティバル」のガス灯点灯セレモニーをはじめ、昨年から同日に東京ガス主催イベントが開催され、今年は神奈川県立関内学院大学の学生がクラシックやジャズを演奏します。ほかにも、神奈川県立ハーモニー管弦楽団の石田泰尚さんのソロコンサートや東京藝大ウィンドオーケストラの演奏会が入場無料で開催されます。関係団体も商店街はもちろん、神奈川県立歴史博物館、馬事文化財団など多くの人たちの力で成り立っています。

街や施設がすでに「文化的コモンズ」として多くの人や価値を抱えている。それが、関内ホールがあるこの地域の文化の力です。



田中 啓介

たなか けいすけ 横浜市市民文化会館 関内ホール 副館長兼事業部長

STスポット、栄区民文化センター、三原市芸術文化センター、戸塚区民文化センターで館長兼企画プロデュースを歴任。横浜市区民文化センター等館長会議設立幹事。株式会社シアターワークショップを経て現職。KAKUTA桑原裕子、チェルフィッチュ岡田利規、石田泰尚、清塚信也、辻井伸行など新進の若手を逸早く起用。前橋汀子セルフプロデュース、子どものための芸術の学校などを企画。現在、横浜出身の二ツ目による落語会「ここの4人」を準備中。

# 事務局うろうろ日記



ヨコハマアートサイト事務局は、今日も横浜市内の  
あっちこっちへうろうろしています。



7月5日水曜日

アートユニット・ししょーと弟子ギャル「鶴見エナジーポイントプロジェクト」を目指して鶴見小野へ。WeTT実行委員会の拠点ONPOINTに訪れ話を聞くと、まちを舞台にしたプログラムだという。商店街を歩いてみると、思わぬ場所に鮮やかなハートや星が。二次元と現実が交差する新しい風景がそこにあった。

7月8日土曜日

金沢区舞台芸術サークル「潮の音」の歴史探索に参加。次回公演の民話に登場する場所に実際に訪れてみるという企画。歩いているとお寺や石碑などが次々に現れ、その度に歴史が語られ、ふむふむとなる。2時間後たどり着いた称名寺には美しい池が。歴史を語り合っていた大人たちも思わず池を覗き込む。



8月5日土曜日

ミニヨコハマシティ2023の会場、新高島・BankART STATIONへ。「こどもがつくるこどものまち」は大人は口出し禁止のルール。子どもたちはカフェなどで働いて稼ぎ、まちの通貨で買い物を楽しんでいた。今年は地底人の服を扱う衣装屋と、カリンバやギターなどの楽器を手づくりできる店も登場し、まちのパレードは大賑わい。

8月20日日曜日

NPO 法人シーホース工房「未来音楽アートサロン」のため山手アートプラットホームへ。前半は県内で採れた竹でベトナム発祥の竹木琴をつくり、みんなでセッション。後半は専用ソフトでプログラミングの指示を打ち込む。手作業でつくる楽器と数式で組み立てる音楽のユニークな組み合わせを楽しんだ。



## ヨコハマアートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題の解決にアプローチする文化芸術活動、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける活動、ヨコハマの個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。

## 事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局（認定NPO法人 STスポット横浜、横浜市にぎわいスポーツ文化局）  
〒220-0004 横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル B1F（認定NPO法人STスポット横浜 地域連携事業部内）  
TEL:045-325-0410 FAX:045-325-0414 MAIL:office@y-artsite.org WEB:https://y-artsite.org  
SNS :https://twitter.com/Y\_Artsite https://www.facebook.com/yokohama.artsite

## 季刊ヨコハマアートサイト vol.036

発行：ヨコハマアートサイト事務局 編集：認定NPO法人 STスポット横浜 編集協力：大谷薫子 取材・テキスト：小川智紀、森崎花、田中真実  
デザイン：小池佑子 撮影(表紙・特集1 a-c)：金子愛帆 印刷・製本：共進印刷株式会社 発行日：2023年9月30日  
季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしております。